

わが牢獄観（承前）：論説

著者	高田, 保馬
雑誌名	龍南會雜誌
巻	107
ページ	21-34
発行年	1904-10-28
その他の言語のタイトル	わが牢獄観（承前）：論説
URL	http://hdl.handle.net/2298/5711

しへに、穹窿に美むを列ねて炤々たり、吾人は人類の信念と修養の最終の目的として高き天真爛漫を渴仰す。

わが牢獄観（承前）

高田保馬

『五』

然りと雖も、微隙を透して一斑を窺ひ、以て全豹の黒を斷せむは、わが雙鬢の未だ白からずして耄に至らざるを奈何。愛々不禁の無限の悲泪、迸發し來りて其罪なき両腕に詐欺を命じ、竊盜を強ひたるが如きは、其例素より多からざるに非ずと雖、吾人は以て、犯罪の大部なりと、云ふものに非ず。而して、先づ其縷述を敢てしたるもの、誠にそが事情の窮迫、吾人が宜しく痛哭して熱血を彼等の愁涕に加へざるべからざるものあれば也。姦物なほ語るべし。香を錢神の祭壇に焚き、塵を高貴の鼻下に拂はむが爲に、營々として一生の短きを歎するも、皮下一条の紅、眼中一掬の水、之を弱者の同情に注かざるものに至りては遂に濟度す可からず。焉ぞ、心すしも畢生居なき婦女子とのみ云はむ。功名の影は趁ふものをして趁はしめ、利益の跡は慕ふものをして慕はしめよ。余は細目の詳叙に入るに先ち、彼等と共に語るを欲せざるなり。

愛情が變形して罪惡を構成せし如きは、金錢に關するものゝ中に就ても一小部を占むるのみにして、金錢に關する者はまた犯罪全体の一部分なり。されども、此全部かみな其根本の原因として、「貧」の事實を完備して誤らざるをかなしむ。

犯罪者各種比例 (我國にて明治卅四、卅五年分)

殺傷 、〇一九〇七	放火 、〇〇一四八	強盜 、〇〇一八〇	竊盜 、〇八二七一	詐偽取財 、〇二九二七
賭博 、〇六八一九	貨幣偽造 、〇〇〇三七	監視規則犯 、〇一二六〇	違警罪 、七三一六〇	諸規則犯 、〇五二九一

眞理は眞理なり、乞ふ、引例の突飛なるを咎むる勿れ。湖畔に道ふものあり、荷葉水上に浮べりと、一人之を駁すらく、荷葉泥中より生せりと。視神經の精細、以て一分の微を見るべ。數尺の大、歴歷乎として目前に存在せる一事、何ぞファクトの簡單にして明瞭なる而かも二人が眼球の構造趣を異にせるものあらずして、説く所一音を共にせず。之ただ表面と真相とを見たる觀察の精粗による。而してかくの如きは問題の繁雜に従て其差いよく大也。原因結果の關聯や、常に紛糾纏綿、相錯綜して辨別す可からざるもの少からず。其解明や至難の事たり。幾多の史家が拮据經營、古書の堆裡に呻吟して、形容は枯槁し、座席は朽敗するもなほ孜孜として勉むるもの、其然るを認むべからずや。嘗に一世を動搖せしめし史上の大事件のみとは云はじ、悠悠無限の六合の間、一奮の微笑、一葉の搖落、何物か自然の理法以外に逸出するを許容せられたる物あるべき。複雑なる因果連鎖の

容易に判別し難きものあるに至りては、盡く一也。不變の軌道を軋り行く太陽の光被する所、無聲の靈の私語もらす薰風の吹きめぐる所、罪惡は絶えず人の子に構成せられ、衆愚之を見るや怒罵叱咤してやまず。識者と先覺とは其の原由を覓めて、覓めて得ざるなく、得て言はざるなきものゝ如し。然れども、靈妙なる腦髓の作用は光線を收散する兩眼の所爲よりも繁縟にして、知る事は視る事の如くに易からず。一見荷葉の泥中に根蒂を有せるを知る者も、焉ぞ揣摩臆測、這般の真相に透徹する事を保せむ。況や彼湖畔蓮莖の浮泛を説くものゝ如きに至りては、喧々囂々、群蚊よりも甚しと雖、論ずる所知んぬべきのみ。枯腸薄情、冷然として事に臨み、輕拭一回、爬羅審攷の勞なくして自ら知らむとす。背理や取らずして有たむとすると相若く。知らむと欲せば愛せざる可らず、フイヒテ詩人を賛して曰く詩人はよく六合の神秘に通ず、彼よく愛すれば也と。愛するものゝ知るは胸中の眞愛、事物に對し傾注し去りてこゝに事物と同化し、濛々混一、表裏内外、眞相假面、盡く自ら眼中に映射し來れば也。愛なきもの知らず、同情なきもの覺らず、宜なりや輕薄自ら售る新紙の三面、幾多の罪惡詳述盡さざるなきに似たりと雖も、其原因を言ふもの、皮を削りて材に入らず、穀を破りて核に入らざること舉世之を準據として、論議統計つとめざるなしと雖、勉むれば益其眞實を遠かるを見るのみ。荷葉の水上に浮泛せるは事實なるを以て、そを非認するに非ずと雖、泥中に根ざせるを知らずして之れを知れりと云はゞ、其痴や到底及ぶべからず。識者の口を爛して慷慨呼號する所罪惡の原因や、曰く遺傳、曰く家庭の感化、曰く惡友との接近、曰く飲酒と。これ素より虚誕ならざる外相なり。されども其眞諦を熟査すれば「貧」てふ一大素因の儼として疑ふべか

らざるを奈何せむや。

『六』

嬰兒が母胎を出で、始めて空氣に震動を與ふるもの、それは呱呱の聲なり。豫め未來通達の。光榮を告ぐらむ希望にみてる響として認むべからざるには非ずと雖、耳をろばだて、其眞意をさけ。感悟の瞬時、怒濤にもまるゝ扁舟を望む如く、冷汗幾千の毛根を洗ふを覺ゆ。兒は叫ばずや、われにパンを與へよ、然らずばわれに死を與へよと。慈母が柔き乳房を手探して蓄の如き紅唇にふくむ時、その聲はじめてやむ、魚は尾鰭全からずして已に水を要求し、鳥は羽翼生せざるに空氣を呼吸す。水と空氣とは彼等の生命也。人の子に崇高の天職と、至純不瀆の聖靈となきに非ず。されども、畢竟其最初に願欲する所のパンは生存の第一要品也。自然の莊嚴にうたれては淨き理想にあこがれ、天國の快樂を想望してやまざるもの、思こゝに至れば、痛恨の極なりといへども、もとこれ自然の大令、運命の桎梏、人力の遂に變化しうべき所に非ず。乾坤の間載するなき大より破るなき小を通し、秩序整然、一條散せむ、一絲紊るとなき大理法に對する畏怖深沈の念を以て、またこゝにさゞげ、寧しろ怡々として希求の自然に任する外なけむ。人は更に裸を許されざりき。智慧の木の實を味ひては其耻しきに得たへざりしなり。かくて衣食は生存の最要件にして、腦漿と勞力とは先づ之に全力を捧げて、人生活動の基礎は確立す。之なくば、清新の大氣は山にみち野にあふるれども、縦横に錯綜せる血管をのみのこして肺は長へに其活動をとどむべし。そこに滅亡あり、悲慘あり。即次の斷定は來る。曰く、人体の存在とは活躍せる五尺の体軀が地上にあるのみに非ず、衣と食と

を得る道即恆産の伴へることこれ也。

鄒人孟軻、侗儻の資雄偉の材を抱いて落魄蹉跎、而も青雲の志やみがたく、遂に自ら山東の野草を趁ひて齊宣に説くや、王頑冥さとらず、即善諭巧導、例を卑近にとり理を高遠にはせ、舌をたぐらしめてとくらく、

今王發政施仁、使天下仕者皆欲立於王之朝、耕者皆欲耕於王之野、商賈皆欲藏於王之市、行旅皆欲出於王之塗、天下之欲疾其君者、皆欲赴愬於王、其如是、孰能禦之、王曰、吾懼不能進於是矣、願夫子輔吾志明以教我、我雖不敏請嘗試之、王曰、無恆産而有恆心者、惟士爲能、若民則無恆産因無恆心、苟無恆心、放僻邪侈無不爲、已及陷於罪然後從而刑之、是罔民也、焉有仁人在位、罔民而可爲也、是故、明君制民之産、必使仰足以事父母、俯足以畜妻子、樂歲終身飽、凶年免於死亡、然後驅而之善、故民之從之也、輕、今也制民之産、仰不足以事父母、俯不足以畜妻子、樂歲終身苦、凶年不免於死亡、此惟救死而恐不贍、奚暇治禮義哉、欲行之則蓋反其本矣。(梁惠王章句上)

真人亡びず、哲人は死せず、死せず亡びざるは鏤板の磨滅せず石碑の腐蝕せざるが爲に非ず。至誠の天地に合一して、説く所真理の一貫せるあればなり。時切の大波ゆるやかによせくる所、發芽搖落循環してやむどきなく、新陳代謝して盡くる時なしと雖、水の二容が酸素の二容と水素の二容とより成り、空氣が窒素七十九と酸素廿一との混合より成るとにして失はれざる以上、聖賢の言か永劫に亘りて變せざること、坤球の圓きがごごからむ。宜なり、古往古來、何れの邦國や、何れの時

代や、恆産なきものに人たるを許したる。無恆産有恆心者惟士爲之。果して之あるかわれ知らず。人に肉体あり、餓ては食はむことを思ひ、渴しては飲まむ事を思ひ、天雪ふりては衣ん事を思ひ、雨ふりては家せむ事を思ふ。性慾ある所以也人に四肢あり、聞けばとらむことをつとめ、見れば得むことをつとむ。活動ある所以なり。關白秀吉、名護屋に陣して威鷄林八道を風靡したる時、寛林の群蟬喧きを怒りて叱咤したりき。されどもそは無効なりし。爾後三百年、松風夏を迎ふる毎に、蟬噪之に和して古英雄の痴を罵詈すぞぞ。げにや、三軍も將をば奪ひつべし、匹夫も其志を奪ふ可からず。人が其性慾の向ふ所に従ひて、渾身の活力をこれに傾倒することこれ自然の所作にして、行動は四肢を假れりといへども裏面藏せられて無限の潜勢はあり。これを以て雄渾にして奔放、鋭鋒閃乎として何等の之を止め得べきものなし。思ふに、涓々として晝夜をすてざる水の如きか。流動してやむこと無きは水の活動力なり。高きを去りて低きに就くは其性慾なり。兩者合一するときは流下の勢はなり、時としては洋々たる大江の壯觀、時としては飛瀑奈落に注いで地軸を折く概あり。緩徐勢を異にすれども、之が逆流を望まむは何等無量の金剛力。もしそれ雨師一たび憤を發すれば奔流直下、白馬の驅るが如く、滔々其勢に任じて野を洗ひ、家を洗ひて其の有益と有害と素より顧慮する所に非らず。恆産無きもの、境遇急迫して身は窮地に陥るも活動の勢力は少しも滅殺せらるることなく性慾の熾烈なる事毫も變異する所を見ず。思へらく、今はたゞ四肢の作爲に放任して願望を飽充せしむれば足る。かくて饑餓を免れ、凍餒より救はるゝ事を得む、以外のこと吾闡知する所に非らずと。西人の稱して窮民は暴力のみを有すと云ひ、或はまた、I want so I plunger と云ふ

もの、誠に這裡の消息をよく熟察せるものと謂ふべし。然り、全く自然の性格に委棄して、之を困厄の地位に放たば、奪掠と殺伐とに嚮往すること水の沛然として落つるか如からむ。恒産なくして恒心を保たむは人の自然に得可きものに非ずして、何等の束縛と制規との下にありて始めてこれあるべきものたり。非禮不見非禮不聞、禮儀三百威儀三千、足の容は重く、顔の容は直き儒教の教徒に非ずむば、渴して盗泉の水を飲まざる事あらじ。人間最上の美德を体现するにつとめ、禮節廉耻を以て金科玉條となし、修養鍛練、義を泰山の重きに置き、死を鴻毛の輕きに比す。一たび意氣に感じては功名誰亦論的武士道德の三昧に悟入して、始めて食はねど鷹揚子の清風に到達するを得む。而してかくの如きは普通窮民の夢想たもせざる所也。

まことに、恆産なきものゝ行爲は性慾の指示するまゝに直進して、慎思顧慮、事の是非を區別し、善惡を判明する違なく、五尺の軀と四個の肢のなし得べき所、盡く行はざるなく、行うて遂げざるなし。公然罪惡の干犯せらるゝもの何ぞ驚くに足らむ。恒産ある富者にありては決して然らず。前者を以て自然の川流に比すべくば、こは湖水より一定量を分派せる水道の如きにもたとへ得べけむか。瀦水は流れ、流れて落ちずは非ず、落ちて早からずは非ず、早からずは非ずといへども水量に分限あり、水力に定勢あり、灌溉給水、其地方に至大の恩賚をもたらせども、遂に汜濫の憂患を與へず。宛ら水に自制樽節の美德あるものゝ如き、みな富者か状態に類せずや。陶朱猗頓の豪富と、酒池肉林の榮耀とはしばらく言はじ。蓄貲倉廩に堆く、幾頃の田圃一望蒼たり、逸樂悠悠、仰いで考妣に事へ、俯して妻子を養ふに足るあらば、人生清福の大半こゝに存す。襟懷自らにして綽々た

の餘裕あらむ。古人は云ふ、衣食足りて禮節を知り倉廩實りて榮辱をしる。舉世混濁道義日に壞ると雖、本心尙眞愛は儼乎としてすたれず、少しく餘裕を現世に得たるもの、思一たび肉体を離れば仁義の念人道の慮、混々として胸中に湧いて盡きず。性慾の命する所といへども、事爲さるるありなしてつくさるるあり。行跡一定の規矩準繩を辿りて、敢て離るゝ事なし。夫れ人体の存在は恒産の副添を意味するが故に、その欠ぐべからざるは恰も兩脚の缺ぐべからざるが如し。恒産なきものは兩脚なきものゝ如く不具なり。完全の体格を具備せる者の間に跣者をして共に行動せしめば、直につまづかむを知れるものは、恒産なき不具者が社會の修羅場に奔走する時、他人と同一の歩調を保持する能はずして、先づ罪惡の淵に陥るを疑ふ可らず。而して悠悠自適、追らず、あせらず、天上の星辰が其軌道を辿りて急かず、されどもをやみなきが如くに、堂々としておのづから、社會の所謂正路をゆく者は富者也。

而も所謂名けて罪惡と云ふものゝ富者に稀なるは、斷々乎としてこれ、品性の純潔と、人格の崇高とを意味する者に非ず。其こゝに到れるは、四圍の狀況と對照する時、これ必然の理數にして、偶々以て人の行爲の境遇によりて支配せらるゝことの如何に大なるかを徵證するに足るのみ。憐むべき人の自然よ。順境此の如き彼等、往々法律上の犯罪に至るもの少しとせず。されども事物奇怪多し。貧者に對しては驚慧なりし捕吏が爛眼も、まぶたを閉じて見る事なき也。鎖音鏗として日夜獄舎に聲あれども、彼等に對して其用をなす事なきなり。白晝の弄花は殿樓の奥に公許せられて、橋下深夜の賭博は罪囚を作り、錦繡を飾れる大盜は國家の要途に當りて、鼠竊の徒は監房の苦痛に泣く。

權勢と黄金との社會を腐蝕する力驚くにたへたらずや。されども、漫に之を咎めむは非也。彼等眼中一片正義硬直の念なからしやは。而して唯々諾々、婦女子の如きもの、長者の逆怒に抵觸して妻子と共に道途に啼泣せむより、職に安じて悠悠歲月を樂むの利を思へばのみ。彼亦境遇の爲に不義を致してたる弱者也。吾人は寧ろ憐愍の涙を注げども、遂に叱咤し去るに忍びず。あゝわが筆汚れはてぬ。乞ふ更に論歩を進めむ。

『七』

棕櫚の葉繁る赤道のあなたより、氷上海豹の夢寒き北極のはてに向ひて、森々たる海中、藻草のゆらぎゆるやかに流れ行くらむ潮のさまは、誠に自然の姿に非ずや。白雲いゆき憚る峻嶺の頂、鷺鳥一たび羽ばたくや、天風徐に吹き落ちて遙に下界の紅塵を拂ふは、これ自然の勢也。潮の逸流を命ずるに何の神ありし。山嵐の颼々、焉ぞ意ありて然らむや。富める者が資産を擁して社會にたつ時、よしや、豪華の驕奢に耽るべき餘裕は許さざれ、竹椽に濁酒くみかわす戀人や、背にすがりて玩具をねだる愛兒か慰藉には、世路の嶮巖に苦み皈る日々の疲勞も全く洗はれつ可し。適度なる勞動と腦力の使用とは、優に一家を支ふるに足り、何等の苦慮なく、憂愁なく、團欒の和樂長に盡きず、春光熙々たり、秋日煦々たり。安慰の境地にありて、内には良心の光かすかに存して未だきねず。一舉一動、盡く一般社會と歩調を共にして失はざる者は、謂ふに、決して忍ふ可からざる苦痛に耐へて然るに非ず、悠揚境遇の自然に任するか爲のみ。恒産なき者に至りては、其赴黑白相異り。彼等は不具者なり、不具者なるが故に、歩調を公衆と共にする得ずして罪惡の淵に陥没す。かくの

如きは、強ひてかゝるに非ずして、おのづからかゝる也。おのづから此の如きを以て、之をして公道を踏みて誤らざらしめむには、必ずや、何等の束縛と、制規とを要す。されども、其束縛は外部よりの壓迫に非ず、制規とは他人の干渉を意味せず。内部の理性に、陶冶と鍛練とを施し、自在なる活力を與へ、以てろが五尺肉体と主となりて、凡ての性慾を左右し、願望を線縦するに至るものにして、自己、自己を制御し、衷心衷心を支配するを意味す。鏗爾たる鐵鎖と、峻烈なる叱責とは、少しも之に與る事なきなり。

而して、これを得しむる者は教育即これ。

教育の實已に示されしは、幾千年の昔、草綠なるカナンの野邊に牧人が星影仰ぎし時なりけれど其言詞の定義紛々として尙定らず、さはれ、ろは本篇の主眼に非ず、區々たる論議を避けて、碩學コムトの言にきかむか。教育とは、人の性能を至完、至美の域に發達せしむるにありと、之ある哉、首を擧ぐれば驚くにたへたりや、多種多様な天下の狀況。しかも、満目の風物、何物か人の子に指導と、訓戒とを與べさる。巷には走る者、驅る者、泣く者、笑ふもの、喧々たり、囂々たり、唼々たり、唼々たり、麥芒を割るが如く、砂磔を碎くか如し。山野に充ちて溢れざる者は芳草の萋々也野花の芬香也、落葉の颼々也、流水の奔逸也。斷雲一片悠として其上に浮べば、曉嵐ゆるやかに河を渡り、白雨一たび過ぐるや、長虹天宇に懸りて美彩燦たり。人界の紛擾萬有の現象は、常に人の子が周圍に纏綿して、其感化は漸次なれども不斷なり。之を以てコムトの言を以て廣義に解釋すれば、覆載の間、音響、光色、盡く吾人の教育者にして、視聽は絶ゆる事なき教育なり。さなりや、幼

軀胎衣を出で、眼簾を開けば、見よ、碧昊高さ九萬里、瀟氣流露して滿天拭へるにも似たりや、淡夢の如き遠山、悠として茫茫地平の線上に浮ぶ。四時代謝し、寒暑來往し、晴雨交到す、變化や靈妙にして、出沒や幽玄。怪異の念慮と、感情と、こゝに始めて柔き腦漿に宿りてより、朝に、夕に耳朶をうち、目に觸るゝ外界の狀況は、益これに影響して、こゝに形成せられたるもの、知覺常識これ。思ふに、こは人工を加ふることなくおのづからにして成るもの也。要するに自然の賦與に外ならず。されども、凡ての方面に人は自らにして完全を許されざりき。否、完全に近づく事すらも許されざりき。天授の賦與と稱するもの、そは璞玉の極めて疎剛なるものゝ如し。彼に人工の彫琢を要する如く、これに人工の鍛練修養を要す。要せらるゝもの、名けて狹義なる教育と云ふ。吾人をして、しばらく、この論義に縁遠き智育を説くの煩を避けて、德育につかしまよ。

人に天賦の理性あり、上、上智より、下、移らざる下愚に至るまで存せざることなし。存せざることなしと雖、人は不完全也。畢竟充分なる事能はず、訓練の宜きを得、教養の度に適ふものなくば、個人の行爲上に於けるその發展を見む事は頗る難事に属す。炎々として燃れてやまざる性慾は、口腹に耳目にあらはれて、常に隙の乘すべきあらば其暴威を逞くせむとし、四肢と肉体とは絶へず爲に線縦せらる。境遇順にして、憂患なく、顧慮なき時に於ては、常情常識之を抑壓するを得可しと雖悲惨と、煩悶と、切迫し來るや、性慾の力さながら大河の決するが如し。鍛練せられ陶冶せられ、活力湧沸せる理性の力に訴へずは、何物が之を制御するあらむ。颶風と暴風とは野を吹きめぐりて、ひとへに枝を折り、幹をくじかむ事をつとむ。施肥栽培、樹木を強固たらしめて、頑抗抵立、よく

繁茂して良菓を結はしめむは、之老圃のこと也。恒産なき者、たまたま窮況に陥るや、性慾の誘惑は絶へず肉体を墮落せしめむに汲ふたずや。至純なる理性の力もて之を斷拒して、自己自己を制御し、衷心衷心を支配するに至り、以て崇高なる五十年の生涯を送らしめむは、思ふに教育の效果にあらざるなきか。

翻りて思ふ。巷に彷徨せる貧者が身に、果して何等の教育ありや。彼等の慘狀眼前に提供せらるゝ事、頻々今の如き時に當り、此疑問を發するの寧ろ痴に類せるを覺ゆ。夫れ、洋の東西と人種の黒白とを論せず、苟も教育の必要を知らずして、存立を現代に許されたる國家はあらず。廟堂の重臣、在野の有識、之を知り之を説いて、云ふ所侃々。義務教育の實行は今や、あらゆる邦國を通して、深山の僻地より率土の濱に及び、各國其就學兒童の統計を查表して普及の誇示につとむ。されども、事實は必ずしも表面の外装と一致せず。外装を捉へて真相の之と符合すべきを速斷せむは、塵界の肉體的快樂を追求して、悠悠歲月を樂む俗物のなす所、天下の憂に先ちて憂ひ、天下の樂に後れて樂む先覺者の事に非ず。統計の數字に眩せられて、喜笑讚歎、現代の文明を謳歌せむとするものあらば、吾人は寧ろ其痴を憐むの情にたへざるなり。讀書牙籌のことしばらく問はじ。僅か四ヶ年間の義務教育てふ者、素より効果なしとは言はず。更にまた、僅少の皆無にに優る事を知らざるに非ずと雖、未だ年少東西を辨せざる時期に於て、ただ暗誦素讀、宛ら盲僧の讀經に類し、一方、師傳たるもの高尚なる品性に缺乏せる、甚だしきは腐敗墮落の聲あり、以て、活きたる人格の兒童か天稟を導くに何等の力あるなし。或は、幼時の訓誨、其意淺しと雖、腦髓に印すや深、よく彼等が一生を支

配すべしと言ふとも、机上の空論は實例の確証に若かず、説く者、何ぞ教へて餘師ある日々の事件にうときや。畢竟、社會は多事なり、多端なり、性慾は熾烈也、強盛也、境遇の壓迫は悲惨也、酷薄なり、十歳を超へざるまで僅々四年間に注入せられたらむ、薄弱にして活きたる方なく、未熟の頭腦に入りて臆氣なる倫理思想が、如何許彼等一生を指導する方ありやは、一目火を睹るよりも明なりとす。若し、産豊にして、家に若干の貯蓄あらば、進んで幾年の修學、うが智徳の練磨をして完全ならしむる事あらむも僅に義務教育の年限を終ふるや、直ちに幼軀を抱いて専心業務に従事し、一切他を顧る違なき貧者に至りては、其運命や抑又悲むべからずや。而も、更に思を致さざるべからざるものあり。社會の最下層の地位に困厄せるものこれ。糟糠尙忍ぶべく、百結の鶉衣尙甘すべし、厨にたゞ空鉢の横るありて、衣るに一領の弊袍なく、妻は飢餓になき、兒は寒威に泣く。此時に當り、一冊の教科書、幾錢の月謝、其支給焉によりてか求むべしとするぞ。況んや、之を工場に送り、炭礦に投じ、或は農家に傭賃せしめば、弱少尙一身の衣食を得ざるなきに非ず。哭すべきはこれらの子弟なるかな。何等造化の惡戯ぞ、他を羨む性質を人の子が腦裏には刻みし。夜はくだち行く三更の鐘薄衾の寒夢ふとさめて、思一たび一身の不遇に及びては、感慨縱横、斷腸の念胸に溢るゝもの無からじや。太陽の光線は四海に浹被して、野と、山と、海とを擇ばず、明暗厚薄、あつて存せずといへども、汚れたる人の子によりて造られし貧富の禍福は、腹黒く心曲れる世の輕薄者流に私して、機變を知らず、心すなはなる優しき小羊には、その惠を與ふる事無し。社會を混濁に救ひて清徹に歸せしめ、影くらき道義の光に油加ふるものとみ讚美せりし教育の二字も、思へば、あ

はれなる弱者にいよく社會の虚待を被るべき事情を附加する悪文字なりしかな

三十四

(未完)

余は更に叫びたり、「慈悲なま、更に只た一分間を待ちて、余の特赦の來るま否まを驗せしめよ。公等若し之を肯ぜずば、余は死力を竭して抵抗すべし。」

判事と余とは室と出でゆきぬ。室の内には只だ余と兩個の憲兵とを刺するのみ。

嗚呼恐ろしき群衆恐ろしき叫喚の聲。余は如何にして彼の群衆の圍みを脱することを得むか。然れどもかくする間に余の特赦或は來り至るべし。咄惡人、彼等は余を斷頭台上運び去らむぞするか。

(ユージェーの死刑前の六時間末尾)

